

# 1870年代前半ヴェローナの幼稚園

## —「イタリア教授同盟」会報の分析を通して—

Verona's kindergartens during the first half of the 1870s:  
Analysis of bulletins of the "Lega Italiana d'Insegnamento"

オムリ 慶 子 \*

### Abstract

This study aims to reveal the actual conditions of Verona's kindergartens during the first half of the 1870s, focusing on the 1869–1875 period, when Michele Colomiatti was in the office of Verona Women's Normal School. This study analyzes bulletins of the "Lega Italiana d'Insegnamento (Italian Teaching Union)" and other reports present in the Verona National Archives Library. Results of the analysis revealed the following. The kindergarten was positioned as the basis of people education in the Italian national unity. They had relations with foreign unions, such as those in Belgium and France. The management of kindergartens began with equity investments from donors and with bank support. The Union had six kindergartens wherein poor and rich children received education together. The educational contents emphasized Italian language teaching rather than Froebel's Gifts and Plays with the viewpoint of Language Unification.

キーワード：イタリア教授同盟、ヴェローナの幼稚園、ミケーレ・コロミアッティ

### 研究の課題とその背景

イタリアへの幼稚園導入は、1857年頃から、教育に携わる神父たちによってフレーベル式幼稚園の紹介が行われ始め、実践レベルでは1867年、ウッティーニ (Uttini, Carlo) 神父によってピアチェンツァの幼児学校 (scuola infantile)<sup>1)</sup> に実験的にフレーベル・メソッドが採り入れられた。

イタリアへの本格的なフレーベル幼稚園導入は、イタリア幼児教育史の定説によるとピック (Pick, Adolfo 1829–1894) の活動から始まるとされ、1869年11月ヴェネツィアで、ピックが関わりレーヴィ (Levi della Vida, Adele 1822–1910) が開園した聖使徒幼稚園 (Giardino dei SS. Apostoli) がイタリア最初の本格的な幼稚園だとされている<sup>2)</sup>。ピックはユダヤ系ボヘミア人であり、反オーストリア戦線に加わってオーストリアの捕虜となり、オーストリア軍の兵士としてイタリア独立戦争を制圧するためイタリアに送られた<sup>3)</sup>。イタリアの敵であったオースト

リア兵が、なぜヴェネツィアに留まることになったかについて書かれた文献は発見されていないが、ヴェネツィアに居を得てドイツ語教師として身を立てる中でフレーベル思想に出会ったとされている。ピックが関わった幼稚園はレーヴィの幼稚園の他に、1871年リアルト橋の近くに開園した自身のヴィットリーノ・ダ・フェルトレ幼稚園 (Giardino Vittorino da Feltre) がある。

ピックについては、ガスパリーニ編纂『アドolfo ピック その思想と著作』(Adolfo Pick. *Il Pensiero e L'Opera*, vol. I, II, III, 1968–1970)<sup>4)</sup> があり、フレーベル思想や幼稚園に関するピックの著作、マーレンホルツやイタリアの幼稚園推進者との間に交わされた書簡、そして為政者へのさまざまな申請書や嘆願書などが集められ注釈が加えられており、フレーベル幼稚園導入を扱った幼児教育史研究の多くはこれを基礎文献としている<sup>5)</sup>。また近年では、ヴェネツィア市教育委員会が中心となり、2003年3月15日から5月4日までカンディアーニ文化セ

\* Keiko Omri 教育学部教授

ンター (Centro Culturale Candiani) で「黒板の裏側 - 1866年から1977年の学校の世代」(Dietro la lavagna - Generazioni a scuola 1866-1977) と題する展覧会が行われ、ヴェネツィアの学校教育についてだけでなく、ピックをはじめとしたヴェネツィアの幼稚園に貢献した人物や師範学校の歴史紹介、そして師範学校生徒が製作した手技(作品)も展示されていたようである。現在この展覧会の記録はweb上で公開されており、研究成果を見ることができるようになっている<sup>6)</sup>。

一方、聖使徒幼稚園より約1か月遅れて1869年12月にヴェローナ女子師範学校 (Scuola Normale Femminile di Verona) 附属として開設された幼稚園については、イタリア幼児教育史研究では、ほとんど扱われることはなかった。ヴェローナの幼稚園は、ヴェネツィアでのピックやレーヴィのように私財を投じて幼稚園を開園したのではなく、女子師範学校という公的な施設の中で、かつイタリア教授同盟ヴェローナ支部という公的な組織の支援を得て開設され、ヴェネツィアの幼稚園に比べて安定した運営が約束されていた。そして女子師範学校長であったコロミアッティ (Colomiatti, Michele) 神父が、フレーベルの基本的な原理を<教育的教授> (Istruzione educativa)、<作業> (Lavoro)、<快活さ> (Giovialità) の3つに整理したことによってフレーベルの思想が理解されやすくなり、これを「教育システム」(Sistema Pedagogico)<sup>7)</sup>として女子師範学校で、またコロミアッティが主催していた「フレーベル講習会」(conferenze froebelliane)における幼児学校教師のリカレント教育の中で教授することによって、イタリア各地にフーベル幼稚園を普及させていったのである。この陰には、イタリア教授同盟地方支部の連携網があり、これを通してヴェローナ支部から発信されたフレーベル・システム<sup>8)</sup>がイタリア各地に広がっていったのである。

このようにヴェローナ女子師範学校長コロミアッティのフレーベル幼稚園導入への貢献は、ピックのそれに勝るとも劣らないものがあると考えるが、コロミアッティについての研究はほとんど進んでいない<sup>9)</sup>。

コロミアッティは現在までの研究で、人物像として未知の部分が多く残されている。彼の生没年は不明で肖像画もなく、ヴェローナ女子師範学校長として活躍したこと以外は断片的にしかわかっていな

い<sup>10)</sup>。今年3月ヴェローナ調査の折に聞き込みを行ったが、イタリア新政府からの任命を受けヴェローナ女子師範学校に赴任したコロミアッティであったが、ヴェローナ市にはレジデンスの記録は痕跡すらなく(同時代の同盟の人物は確認できた)<sup>11)</sup>、そして法王庁古文書館ヴェローナ支所にも聖職者としてのコロミアッティの記録を見出すことはできなかった。

イタリアで唯一のコロミアッティについての研究 (Bucci, 1990) では、イタリア教授同盟ヴェローナ支部の機関誌を通して、歴史に埋もれたコロミアッティをフレーベル改革者として位置づけ、同盟との関係の中で、女子師範学校やリカレント教育におけるコロミアッティの活動を明らかにしているが、幼稚園については論じていない。筆者はこれまでの研究で、コロミアッティを取り巻く時代的・思想的背景からコロミアッティをフレーベル幼稚園導入期に位置付けており<sup>12)</sup>、本稿では、イタリアにおける初期幼稚園としてのヴェローナの幼稚園が、どのような規模で、どのように運営されていたのか、そしてコロミアッティがそこにどのように関わったのかという視点から、ヴェローナの初期幼稚園の実態を明らかにしたいと考えている。

用いる資料は、ヴェローナ国立古文書館所蔵の「イタリア教授同盟ヴェローナ支部会報」(*Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento, Bollettino*)のうち、今回の研究では、ヴェローナ女子師範学校附属幼稚園開設年度(1869年)からコロミアッティが女子師範学校長の職を解かれ異動となった時期(1875年4月)に限定して1869年4月号、5月号、6月号、7月号、8月号、10月号、12月号、1870年3月号、7月号、1871年3月号、6月号、7月号、1872年12月号、1873年8月号、11月号、1875年7月号を中心<sup>13)</sup>にその他のヴェローナ支部の報告書とを合わせて分析する。

## 1. ヴェローナ女子師範学校附属幼稚園の成り立ち

ヴェローナ女子師範学校附属幼稚園は、イタリア教授同盟ヴェローナ支部の支援によって、1869年12月に女子師範学校の附属として開設された<sup>14)</sup>。

イタリア教授同盟ヴェローナ支部は、「民衆教育友の会」(Società di amici dell'istruzione popolare)を基礎に、1868年9人のメンバーでヴェローナ支部

を立ち上げた。教授同盟はイタリアだけに限らずヨーロッパに広がっている同盟で、歴史によるとその基礎は、1784年ネーデルラントで組織された平民教育の普及を目的とした公共福祉協会（Società di ben pubblico）に遡ることができるとされている<sup>15)</sup>。その後ネーデルラント王国から独立したベルギーで、公共福祉協会を基盤として1865年ベルギー教授同盟が成立し、他のヨーロッパ諸国にも広がった。ヴェローナ支部を立ち上げたとき、イタリア教授同盟の中ではすでにローディ、ミラーノ、パードヴァ、ピアチェンツァ、パルマ、ボローニャ、ヴェネツィアなどの支部はあり<sup>16)</sup>、同盟の目的は民衆教育（educazione popolare）であった。1871年発行の支部の年鑑（Almanacco）によると、ヴェローナ支部は民衆教育として、労働者のための講座（数学、幾何デザイン、物理、化学、機械）、徴兵された非識字の兵士と労働者のための講座、速記の講座、衛生の講座、男性のためのドイツ語講座・フランス語講座・英語講座、女性のためのドイツ語講座・フランス語講座、障害を持つ子どものための健康体操（ginnastica igienica）、デザイン・装飾・人物像や造形の基礎講座、識字のための休日講座、男子労働者のための識字講座、女子労働者のための識字講座、ミシンによる裁縫講座、女性のための簿記講座、女性のための習字講座、男性のための歌の講座、造形芸術の講座、囚人のための講習会、消防士のための数学講座、フェンシング講座等（1871年から、女性のための英語講座、電報講座、女性のためのフランス語準備講座も開講した）があり、その一つとしてフレーベル幼稚園があった<sup>17)</sup>。これらの活動は、公教育省、市（patrio municipio）、州議会、労働者協会、国民銀行（Banca Nazionale）、民衆銀行（Banca del popolo）、民衆相互銀行（Banca mutua popolare）、産業市民の家会長、種々の法人や名誉市民、賛同者によって支えられていたと記録されている<sup>18)</sup>。

1869年8月19日、ヴェローナ女子師範学校<sup>19)</sup>校長コロミアッティは、幼稚園を開園するための準備支援を申し出たイタリア教授同盟ヴェローナ支部長に礼状を送っている。コロミアッティは、フレーベル・システムを発展に導くための寛大な支援を受け入れ、「神が、善をなすことを欲している高貴な都市に私を送ってくださったことに感謝している」<sup>20)</sup>と綴っている。そして、政府は女子師範学校附属の

2つの初等クラス設置のために庭を使用することをすでに認めており、そこで幼稚園を開くことを許可するだろうと述べ、さらに近い将来、本物の教育を行っている幼稚園を探してベルリンやジュネーブまで行かなくてもよくなるだろうと抱負を語っている。

ヴェローナ支部委員会は、フレーベルの基準に沿った幼稚園を開く予算を計上し、作業を始めた<sup>21)</sup>。また委員会からは、名称練習（nomenclatura）のための日用品や農業、工業に関するさまざまな絵が描かれた壁かけと、子ども用のそれぞれ50台の机と椅子が準備された<sup>22)</sup>。

ヴェローナ支部の支援が促進された背景には、オーストリアの新しい法律が影響している。ベルギー教授同盟の会報に掲載された民衆教育に関するオーストリアの法律第27条である。それは「すべての師範学校は、教職実習生の実践教育のための模範学校として、民衆学校を持たなければならない。つまり女子師範学校には1つ以上の幼稚園を付設しなければならない」<sup>23)</sup>というもので、この法律はヴェローナ支部会報第6号（1869年10月）に紹介されただけでなく、その後も支部の幼稚園運動を援用するように会報の中で度々言及されている。この2か月後の12月、ヴェローナ支部の支援を受け、コロミアッティを園長として女子師範学校にフレーベル幼稚園が開設された。

ヴェローナ支部会報第7号（1869年12月）には、「ここ数年、イタリアではフレーベル幼稚園について書かれてきた。著名なドイツ人教育者のメソッドによる学校機関が半島（著者注：イタリアを指す）に必要であることを熱心に認識し、多く語られながらも何も成せなかった。」<sup>24)</sup>と述べられ、しかしながら、女子師範学校校長であり支部の会員であるコロミアッティの勤勉なフレーベル理論の研究のおかげと、またコロミアッティが政府や市、支部の支援と取り付けて幼稚園に必要な物品をそろえることができ、1869年12月イタリア最初の幼稚園<sup>25)</sup>の開園を祝うことができたことと記されている。

## 2. 附属幼稚園の運営と教師の待遇

附属幼稚園の運営にかかる費用は、ヴェローナ支部の会計に現れている。前章で述べたように、支部の活動は、政府、州、市、そして労働者協会、銀行、市民の寄付によって支えられていたと記録されてい

図1 (項目の網掛は幼稚園に関する収入・支出)

1869年度(4月～12月)<sup>26)</sup>

収入の部	支出の部
会員からの分担金 941.75リラ	運営費 151.52リラ
国民銀行から 100.00リラ	機関誌印刷費 383.78リラ
民衆銀行から 50.00リラ	株主への3か月分の支払い 59.55リラ
円形劇場集会所から 40.00リラ	関連協会活動への支援 36.60リラ
エンジェニア・騎士G.パッティスタ・アンジェリーニ氏からの寄付 100.00リラ	初年度速記講座運営費 36.00リラ
ペンキ職人バツタジーニ氏からの寄付 5.00リラ	獣医学講習会経費 23.48リラ
	11月14日からの労働者のための講座運営費 78.00リラ
	徴兵兵士のための講座運営費 26.00リラ
	語学、速記講座、その他2年目の運営費 191.50リラ
	幼稚園創設、フレーベル・システム推進費および備品購入費 233.00リラ
	衛生講習会 6.48リラ
合計 1236.75リラ	合計 1225.91リラ

1870年度<sup>27)</sup>

収入の部	支出の部
1869年度からの繰り越し 19.45リラ	負債残部 300.00リラ
1870年度会員からの分担金 1518.00リラ	委員会運営費 387.17リラ
騎士E.グリゴラティ氏からの支援 100.00リラ	機関誌等印刷費と講座事務費 500.95リラ
騎士ディザルジ氏からの支援 9.00リラ	刑務所図書館、支部関連講座のための図書購入費 163.25リラ
リベラル協会から 40.00リラ	衛生講習会 19.25リラ
公教育省から 500.00リラ	フレーベル・システムの幼稚園拡大に伴う備品 150.00リラ
スクデッラーリ氏からの農業に関する小冊子売上金 50.50リラ	講座の光熱費など 547.41リラ
アンジェロ・ガルビーニ氏からの寄付 5.85リラ	集金 121.05リラ
余剰金 10.84リラ	聾唖学校へ 11.00リラ
合計 2253.64リラ	合計 2200.08リラ

1871年度<sup>28)</sup>

収入の部	支出の部
1870年度からの繰り越し 49.74リラ	負債残部 87.00リラ
1871年度会員からの分担金 1374.30リラ	委員会運営費 359.79リラ
国民銀行から 100.00リラ	機関誌等印刷と講座学校事務費 324.32リラ
民衆相互銀行から 100.00リラ	講座光熱費など 474.11リラ
産業連盟委員会からワイン醸造講習会のための6分の4負担金 248.50リラ	産業連盟委員会、ヴァルポリチエッラ農業会支援によるトゥービ教授のワイン醸造講習会 372.95リラ
ヴァルポリチエッラ農業会からワイン醸造講習会のための6分の1負担金 62.16リラ	フレーベル・システム幼稚園(モンタナリー通り)拡大に伴う備品 75.00リラ
軍隊支部から連隊講習会や光熱費に関する負担金 115.00リラ	ナポリ教育学会 100.00リラ
労働者相互協会から 200.00リラ	刑務所図書館、講座のための図書購入費 88.45リラ
1870年度余剰金 47.32リラ	聾唖学校へ 12.00リラ
	集金 109.94リラ
合計 2297.02リラ	合計 2003.56リラ



1872年度～1873年度第1セメスターまで<sup>29)</sup>

収入の部		支出の部	
1871年度からの繰り越し	346.32リラ	負債残部	115.50リラ
1872年度会員からの分担金	1647.44リラ	委員会運営費	641.53リラ
1873年度	801.26リラ		
相互銀行から1872年度	100.00リラ	機関誌等印刷と講座学校事務費	448.91リラ
〃 1873年度	100.00リラ		
食肉協会から1872年度	600.00リラ	トノーリ、カニョーリ、マツツア、タッデア・ダ・カッラーラ、F.アッ	
〃 1873年度	662.50リラ	リエーヴィの5つの幼稚園開園に伴う費用	6340.78リラ
Mass. Montan.集会所から	15.19リラ	幼稚園運営費用	3174.99リラ
国民銀行から1872年度	100.00リラ	支部関連の講座光熱費など	474.60リラ
〃 1873年度	100.00リラ		
労働者協会から	200.00リラ	支部図書館、講座の図書経費	102.00リラ
市割り当ての国からの補助金		聾啞学校へ（2年分）	24.00リラ
1872年度	500.00リラ		
〃 1873年度	500.00リラ		
1872年度カッサ・ディ・リスパルミオ銀行割り当ての		1872年から1873年第1セメスターの集金	201.38リラ
市の資金から	500.00リラ		
パウエル庭園タベの会から幼稚園に	247.00リラ	労働者協会へ6%利子貸付金完済	1037.50リラ
州代議士会から幼稚園への支援1871-72年度	33.17リラ		
ヴェローナ軍隊支部から連隊講習会や光熱費に関する			
負担金	118.25リラ		
F.アッリエーヴィ夫人を偲ぶミサを企画した市民の会			
を代表してプエッラ弁護士から	72.00リラ		
F.アッリエーヴィ夫人の名を冠した幼稚園を創設する			
市民の会を代表してイブセヴィッチ氏から	300.00リラ		
幼稚園と講座創設のための国の補助金	2000.00リラ		
労働者協会から6%利子貸付金	1000.00リラ		
幼稚園の月額料金の収益	1794.85リラ		
民衆教育友の会から	302.33リラ		
1871年度余剰金	62.84リラ		
合計	12103.24リラ	合計	12561.19リラ

1873年7月1日～1874年12月末まで<sup>30)</sup>

収入の部		支出の部	
余剰金を含む1873年第1セメスターからの繰越金		1873年第1セメスター負債残部	475.18リラ
	206.98リラ		
園児から支払い料金収益	1987.50リラ	事務員給与を含む委員会運営費	682.75リラ
会員の分担金	2148.90リラ	支部機関誌印刷と講座事務費	241.07リラ
ヴェローナ市を通してカッサ・ディ・リスパルミオ銀		幼稚園運営と維持費	8484.98リラ
行が年1000リラ、1873年と1874年分寄付	2000.00リラ		
支部の1872年から1873年9月までの赤字を埋めるため		支部関連の講座光熱費など	537.15リラ
功労者からの支援	363.85リラ		
C.ファラルド知事から、1874年元旦のための寄付		幼稚園支援のための体育祭やくじ引きの費用	
	100.00リラ		325.60リラ
カッサ・ディ・リスパルミオ銀行から、マルカントニオ・ベンテ		1873年度第2セメスターと1874年度会員分担金取り立	
ゴードイ氏が残した基金の4%利子、1874年分	400.00リラ	てのため	191.57リラ
民衆相互銀行から1874年特別寄付	25.00リラ		
ヴェローナ代議士会から1874年に、特別寄付300リラ、			
ウンベルト王子ご成婚記念として26.43リラ、他に100			
リラ	426.43リラ		
1874年、コンコルディア協会の会員たちからの社会的			
基金の譲渡	399.80リラ		
1874年のセメスター、ベンテゴードイ氏の債券満期の			
分割支払いで942.50リラ、動産売り払い金818.09リラ			
	1636.18リラ		
1874年、M. Weiss氏からの献金	25.00リラ		
1874年、王国政府から	1000.00リラ		
1874年、A. ベッレグリーニ伯爵から、アリーナの慈善			
館による収益	64.25リラ		
幼稚園のために行われたくじ引き収益	38.00リラ		
A. D. コリス夫人、くじ引き1等懸賞金を1874年に寄付			
	40.00リラ		
1874年、高校と王立技術学校の生徒による体育祭の税			
込売上金を幼稚園へ	226.00リラ		
ヴェローナ市が体育祭費用のために共同出資			
	120.00リラ		
1874年ヴェローナ市が憲法祝祭に伴う寄付	500.00リラ		
合計	11707.89リラ	合計	10938.30リラ

たが、実際の会報の収支決算表を見てみると、それらの支援は定期的なものではなかったことがわかる(図1)。

収入の最初にあげられている「会員からの分担金」は、年会費のようなものなのか株主としての投資なのか不明である。1869年度の収入を見てみると、会員からの分担金は941.75リラで支部の収入の部の約76%を占めていることは驚きである。ヴェローナ支部開設時は200人の賛同者がいたという記録があり<sup>31)</sup>、また、会報創刊号には、支部の株一口が年6リラであることが宣伝され、投資株が200に達するだろうことが書かれているため賛同者の人数と一致する。しかしながらこの場合、分担金が6リラでは割り切れないため疑問が残るが、ヴェローナ最初の幼稚園が、株式や銀行からの投資を資源としてプロモーションを行ったことは興味深い。

幼稚園の運営について不可解なことは、1871年度までの決算表の収入の部に幼稚園の保育料が、またすべての年度の支出の部に幼稚園教師の給与が全く現れていないことである。1872年度以降の決算表には、保育料収入の項目が挙がっているが、会報には支部が開園した5園のうちカニョーリ幼稚園については有償の子どもの保育料で教師と守衛の給与を賄っていること、しかし他の4園は無償枠の子どもの多いため、幼稚園教師や守衛の給与が支部の持ち出しになっていることが報告されている<sup>32)</sup>。しかしながら、決算表には教員や守衛の給与支出が記録されておらず、これらの扱いは不明なままである。

幼稚園教師の給与は1875年の会報に記されており、1年目は無償、2年目の月給が30リラ、3年目が40リラである(1874年度実績)<sup>33)</sup>。当時のイタリア王国はまだ通貨や重さなどの単位が統一されておらず、リラとしてのこの給与が当時どのくらいの価値があったのかを示す文献がなく、また会報には生活の必需品の値段(例えば小麦粉1キロの値段)などの記録がないため、明確な価値をはじき出すことは困難である。しかしながら、「幼稚園教員の仕事はきつい仕事のため…中略…今後も幼稚園を続けていくなら最低1日2リラを保障しなければならない」<sup>34)</sup>と書かれているため、1日2リラが生活していくのに最低の賃金であるのではないかと予想できる。例えば乱暴ではあるが日本の今年度の最低賃金から現在の貨幣価値に置き換えでみるならば<sup>35)</sup>2リラを約5712円として、30リラから40リラの給与は約

8万5680円～11万4240円ほどの貨幣価値となるのではないか。もし1日2リラを保障する月給となるなら約17万円強となり、幼稚園教師の給与は相対的に低かったといえる。

幼稚園教師の養成は、ヴェローナ女子師範学校と、1870年から始まったフレーベル講習会という名目で秋に2か月の養成コースで行われていた。支部会報の叙述からは、女子師範学校での幼稚園教員養成については詳細な記述はなく、養成コースの方に重きを置いていたようである。養成コースでは生徒たちは、コロミアッティのフレーベル理論についての講義を受講し、附属の幼稚園で実践を学び、最後にフレーベル幼稚園教師としての資格を与えられていた。そこには、地元や近隣の都市のアボルティ・メソッドによる幼児学校の教師が、リカレント教育としてフレーベル・システムを学び、資格を取って自分が勤める幼児学校をフレーベル・システムに変えていったようである。会報からわかることは、フレーベル教育理論と実践の往還にコロミアッティが心を砕き、附属幼稚園での実習に力を入れていたことである。

フレーベル講習会で幼稚園教師の資格を取った教師は評判が高く、修了生は近隣の都市の幼稚園で活躍し、かつイタリアの他都市の幼児学校からは、修了生を採用したいという申し出が多かったと記録されている<sup>36)</sup>。女子師範学校には寄宿舎があり、受講者が宿泊できるようになっていたため、近隣の都市からも受講生を受け入れることができた<sup>37)</sup>。ヴェローナでは、貧しい家庭でも幼稚園に入園を希望する家庭はとても多かったようである。貧しい家庭は保育料が無料であったことと、親が働いている間の託児的な機能に期待をかけていた可能性も否めないが、親の要望に応じて、最初の幼稚園開園からコロミアッティが異動になる1875年までに、ヴェローナ市内に6園開園している。その6園を機関誌から拾い上げてみる(図2)<sup>38)</sup>。

これらの幼稚園の園長はコロミアッティであるが、教育理論だけを唱える名目だけの園長ではなく、幼稚園教員に具体的な教授法を指示する役割をも持った教授法監督者(direttore didattico)であった。第1幼稚園の教師であったバッタジーニの実践記録<sup>39)</sup>からもわかるように、コロミアッティが指導する教授法の内容を幼稚園教師が現場で実践に落とし込むというやり方で行っており、現在のレッ

1. 第1幼稚園（ミケーレ・コロミアッティ幼稚園）、モンタナリー通り（スカーラ通り2番地）  
1869年12月1日開園、園児数 54人
2. アンジェロ・トノーリ幼稚園、スカーラ・サンタ通りボルゴ・タスケリオ通り21番地  
1872年1月26日開園、園児数 73人
3. アントーニオ・カニョーリ幼稚園、サン・サルヴァトーレ通り（ピニャーリ通り19番地）  
1872年6月2日開園、登録園児数 68人
4. ドン・ニコラ・マツァ幼稚園、カンタラーネ通り29番地（ニコラ・マツァ通り59番地）  
1872年9月15日開園、園児数 50人
5. タッデア・ダ・カッラーラ幼稚園、サン・アレッシオ通り41番地（24番地）  
1872年9月25日開園、園児数 85人
6. フランチェスカ・アッリエーヴィ幼稚園、サン・ピエトロ・インカルナリーオ通り（フィリッピーニ通り18番地）  
1873年4月15日開園、園児数 76人

図2

ジョ・エミリア市の公立幼児教育施設で行われているペダゴジスタの役割に似たものではないかと想像する。

民衆教育の推進を標榜していたヴェローナ支部は、市民の要望に応えるのが「崇高なミッション」<sup>40)</sup>と考え、1872年に立て続けに4園を開園したため、資金繰りが大変になった。第1幼稚園を開設した直後から、複数園開設する心づもりはあったらしく、1870年度、1871年度の決算書支出の部を見ると、幼稚園拡大のための備品を購入していることがわかる。しかし1872年までに開設した5園の中で、カニョーリ幼稚園以外は保育料無償枠の子どもが多かったこと、それだけではなく1874年には園児数

400人のうちほとんどが無償枠となってしまう、運営費は支部の持ち出しになり、それに伴い1874年は会報を発行できないほどの状態に陥った<sup>41)</sup>。

ここで幼稚園開園と園児募集のお知らせの一例を見てみよう（図3）<sup>42)</sup>。

第3園以降の募集では、保育料を1リラから3リラに引き上げたり<sup>43)</sup>、保育料有償の子どもの割合を高くしたりしており、また、国会議員や政府視学官、州や市の議員がヴェローナの幼稚園を見学し、そこで行われている保育に感銘を受け、国や州の補助を取り付けてくれるなどの公的資金を得ることができ<sup>44)</sup>、ようやく1875年には、運営が落ち着いたようである<sup>45)</sup>。

### イタリア教授同盟

—ヴェローナ支部—

委員会はヴェローナ市民に、来る26日スカーラ・サンタ通り（サン・ジョヴァンニ・イン・ヴァッレ）に**幼稚園**を開設することを告知するのを喜ばしく思っている。幼稚園の名前はアンジェロ・トノーリであり、彼は支部の最も活動的なメンバーであったとともに、1869年**イタリア最初**の幼稚園であるヴェローナの幼稚園の情熱的な支援者でもあった。幼稚園の教授法監督は、師範学校校長であり名誉会員である騎士ミケーレ・コロミアッティである。幼稚園には40名ずつの男・女児を受け入れる。80名定員のうち半分が無償枠、あと半分が前払いで1か月3リラの負担義務がある。登録はこの12日から、午後2時から4時までの間レオンチーノ通り38番地の支部委員会で受け付ける。登録に必要な証明書は以下の通り。

1. 4歳以上5歳以下であることがわかる出生証明書
2. ワクチン済みの証明書

無償枠希望者は、前述の証明書に加え、カリタス信心会か支部会員による貧窮証明書を提出しなければならない。支部会員名簿は、ミネルヴァ書店かミュンスター書店に置かれている1872年度版ヴェローナ支部**年鑑**に掲載されている。

ヴェローナ1872年1月7日

委員会

Agostini, Belviglieri, Benini, Caperle, Farina, Garbini, Mestre, Sega

図3 （文中の太文字は原文ではイタリックや太文字、大文字などで強調されている）

### 3. 幼稚園の保育環境と保育内容

最初の幼稚園開園に当たって準備されたものはまず、「庭」である。

会報を見ると、「庭」(giardino)という言葉がシンボリックに使われていることがわかる。幼稚園設立間近の1869年10月号に、「フレーベル幼児学校 (Scuola Infantile Froebel) のための庭 (giardino) は、支部の支出として新年度の予算に組み入れられた」<sup>46)</sup>と報告され、幼稚園を設立した1869年12月号には女子師範学校である「教育機関に附設している中庭 (il cortile) を、庭 (giardino) に変えた」<sup>47)</sup>、そして1870年3月号に「支部は、コロミアッティが国から得ることができた中庭を、庭 (Giardino) に変えた」<sup>48)</sup>と書かれ、「今やヴェローナには本物のフレーベル幼稚園 (Giardino Froebelliano) がある」<sup>49)</sup>というように、「フレーベル幼児学校」という旧来の幼児学校にフレーベルの名称をつけただけのものから「フレーベル幼稚園」へ、そして普通名詞である小文字の「庭」(giardino) から、幼稚園 (Giardino d'infanzia) を指す固有名詞としての大文字の「園」(il Giardino) に変化しているのが読みとれる。イタリアの中庭は、今日も残っている修道院をはじめ様々な歴史的建築物に見られる通り伝統的に石畳であり、子どもたちが耕すような土のある庭はほとんどない。フレーベル幼稚園導入まで、イタリアの幼児教育の中心はアポルティ・メソッドによる幼児学校と呼ばれるものであり、フレーベル講習会でフレーベル幼稚園教師としての養成を受けた幼児学校教師が、自分の勤めている幼児学校を幼稚園に変えていったことを、古い石畳の中庭を子どもたちが耕せる本物の庭としていったというようにシンボリックに表現していることを読み取ることができる。

次に支部が幼稚園のために準備したものは、名称練習のための大きな壁かけである。それはイタリア語学習のために、家庭で使う日用品、農業、工業にまつわる絵が施された布製の壁掛けである<sup>50)</sup>。そして子どものための机といすであり、スイスやドイツで用いられているような最上級のものであったらしい<sup>51)</sup>。

1875年までの会報の中には恩物 (doni) という言葉は現れないが、フレーベルの恩物らしきものが幼稚園で用いられている記述が現れるのは、ようやく1871年3月の会報からである。そこには、「ヴェ

ローナ支部が最初の必需品として準備したものは、小さな棒 (stecchetti) でデザインするため、表面に線が入りニスが施された100台の小さな机と椅子。家庭での日用品を模した木や銅のひな型。名称練習のための日用品や工業品の大きな絵。」<sup>52)</sup>「子どもたちはお祭りに行くように喜んで幼稚園<sup>53)</sup>に行く。そこで彼らは毎日たくさんのきれいなものを見て、その名称を学ぶ。立方体や角柱を積んだり、織り紙をしたり、小さな棒でデザインしたり、粘土をしたり、花の世話をしたり、歌ったり、踊ったり、遊んだり、可愛らしいお話しに参加したり、片言のイタリア語をしゃべったりする。」<sup>54)</sup>と書かれ、子どもたちの楽しそうな様子が描かれている。

貧困地区に開設された2園めのアンジェロ・トノーリ幼稚園を訪問した市長が次のように書いている。「窓は磨かれてエレガントであり、必要なものはすべてそろっている。それぞれの子どもたちには、可動式の机と椅子がある。壁には、花や動物の様々な種類の印刷物で飾られている。建物は庭と一体になっており、丘のふもとに位置している。そこは子どもたちのリクリエーションや、名称練習、体操の練習用の器具がそろっている。…中略…メソッドは素晴らしい。なぜなら正確な方法で、平等に、肉体的・知的・道徳的発達を促しているからだ。子どもたちは、物の名前を実物でもって実践的に言語 (lingua) を覚える。小さな棒や鉄のアーチでデザインしたり、立方体や三角柱を積んだり、粘土をしたりしながら、均整 (proporzioni) への目を慣らしていく。」<sup>55)</sup>

これらの記録からわかることは、幼稚園では、フレーベル教育で重視されている恩物を用いた遊びや遊戯よりも、名称練習が重要視されていたことである。イタリアは1861年の国家統一まで、半島の小国はそれぞれ独自の言語を使用しており、言語の統一を持って国民の統一を図った。国語として採用された言語は、ダンテ (1265-1321) 時代のフィレンツェ語であり、死語であったフィレンツェ語を生きた話し言葉としていくのは、大変な困難と長い年月がかかったと言語学者<sup>56)</sup>が記している。その上ヴェローナが位置するヴェネト地方は、1866年によりやうくオーストリア・ハンガリー帝国から奪還した回収地イタリア (Italia Redenta) であり、ヴェネト語を話す住民をイタリア語話者として行くことは、さらに困難を伴うものだったようである。現在のイタリ



ア全土のイタリア語と地方言語（方言、外国語を含む）の使用状態を調査したイタリア政府統計<sup>57)</sup>でも、日常的な場面（家族や友人）でイタリア語を使用する割合はヴェネト地方が23.9%で、全国平均（47.2%）の約半数を割り込んでいる。しかしながら当時のヴェローナの幼稚園では、子どもたちは名称練習を通して片言のイタリア語をしゃべるようになり「ここで行われているイタリア語教授ほど良い物はない」<sup>58)</sup>と記されている。

また、この頃のイタリアには、アボルティ時代にはあまり見られなかった、人間形成は生まれたときから始まるという明確な論調が出てきている。「人間の教育は人生最初の年から形成される。それはちょうど、新芽が光に向かって開く植物の発達のようだ。最初の瞬間から、実際具体的に自然の調和を尊重することに精神を導いていかなければ、義務(dovere)の感情は人間の胸に深く根差すことはないだろう。」<sup>59)</sup>そしてこれこそがフレーベル理論の基礎であり、初等教育の時から若者を優秀で誠実な労働者に、またより高い学びという成功への希望を持って学ぶように導くとしている。この頃民衆教育の文脈で出てきたのが、貧しい子どももお金持ちの子どもと一緒に保育することを通して、子どもたちが社会階層による違いという慣習から解放されること、これこそが「民衆教育の最上の結果」<sup>60)</sup>であるとしている。保育方針は、富める者も貧しきものも平等という理念の下で、フレーベル教育を基軸とし、道徳的、知的、肉体的な3重の完成に向けて教育することであったと考えられる。

#### 4. まとめ

以上のように、コロミアッティが活躍していた1869年から1875年に焦点を当て、イタリア教授同盟ヴェローナ支部に支援された幼稚園の実態の一端を明らかにした。支部の会報の内容は、当時の支部会員にとって、会合での議論や街角で言葉を交わし合ったりする中で理解し合えるのであろうが、文中にはあいまいな表記や脈略なく突然出てくる言葉の意味を読み取るのに困難があった。しかしながら、ヴェローナ支部は他のイタリアの都市と比べて後発組ながら、幼稚園の実践や教員養成についてはイタリア教授同盟の中心的役割を担っていたことは明白であった。会報には詳しく述べられていないが、幼稚園を訪問したマーレンホルツがとても満足そうで

あったことや<sup>61)</sup>、幼稚園の子どもたちが製作した手技を展示していたところ、ペテルスブルクの政府から、ロシアの幼児院に紹介したいとの申し出があったなど<sup>62)</sup>、幼稚園の活動や交流がイタリアだけにとどまっているのではなかった。

当時のイタリアは、統一から10年をようやく迎えるようとしていた時であり、国家というハードの部分の統一だけでなく、国民意識というソフトの部分の統一が大きな課題であったイタリアで、民衆教育は他のヨーロッパ諸国とは違った意味や課題があったのではないかと想像する。イタリアはベルギーの民衆教育をお手本としつつも、「幼児学校に（筆者注：フレーベル・システムを）導入するのは、今の秩序を乱すことにはならない」<sup>63)</sup>という言葉は、この頃イタリア教育界で議論されていた、アボルティ・メソッドかフレーベル・システムかという論争<sup>64)</sup>への立場表明のようにも思える。つまりこのことは、伝統的なカトリック教育かプロテスタント国由来の新しい教育かというものであり、当時の統一間もないイタリアが国として国民として結束しなければならないときに、なぜ外国のメソッドなのかという論争であった。

しかしながら、ヴェローナの幼稚園が為政者たちの注目を集め、金銭的な支援を得ることができたことは、コロミアッティが政府の人事で異動してきた人物であったことも大いに影響しているだろうが、何よりもフレーベル・システムによる幼稚園の子どもたちの様子が訪問者にとって目を見張るほどの感動を与えるものだったのだろう。また、神父であったコロミアッティにより、フレーベルの教育内容だけでなく、カテキズムと具体物による名称練習が付け加えられることによって、プロテスタント的と思われていたフレーベル思想を中和し、かつすべての住民をイタリア語話者とするという統一イタリア王国の使命を実現するものであったことは、為政者の注目を集めるのに十分であったに違いない。

1870年7月の会報には、「イタリアにもフレーベル園がやってきて、ヨーロッパでもっとも洗練された国家になるだろう」<sup>65)</sup>と書かれており、フレーベル幼稚園が新生イタリアの民衆教育にもたらす期待は並大抵のものではなかったことがわかるだろう。

1875年4月、コロミアッティはソンドリオの視学官に任命され、ヴェローナを去った。コロミアッティが去った3か月後の会報に、「すばらしいヴェ

ローナ人を紹介しましょう」<sup>66)</sup>と読者に呼びかけ、コロミアッティの偉業を讃えている。現在のイタリアでも、出身地が個人の人格の重要な部分とされている中で、ピエモンテ人だったコロミアッティをヴェローナ人と呼んでいることは、ヴェローナ市民がコロミアッティに全幅の信頼を置いていることがわかる。コロミアッティは、自分自身の力を国や州、市、そして市民と一つにし、ヴェローナの幼稚園を他の都市のモデルとしての地位に高めたことにおいて、彼へのオマージュを込めて第1園を「ミケーレ・コロミアッティ幼稚園」と命名したことが報告されている<sup>67)</sup>。コロミアッティがヴェローナを去った後、秋の講習会の指導はインノチェンティ教授に託されることになったが、コロミアッティの残した偉業が、その後のヴェローナ女子師範学校や複数の幼稚園、そしてフレーベル講習会にどのように引き継がれていったのかを今後の研究課題としたい。

#### 注

- 1) ウィルダースピン (Wilderspin, S. 1792-1866) の著書 “*Infant Education, The Infant System*” のドイツ語訳を読んで感銘を受けたフェッランテ・アボルティ (Aporti, Ferrante 1791-1858) 神父が、1829年イタリア最初の幼児学校を開校した。アボルティは、ウィルダースピンの方法論を基に独自の教育法を開発し、後にアボルティ・メソッドと呼ばれるようになった。この過程については、拙著『イタリア幼児教育メソッドの歴史の変遷に関する研究－言語教育を中心に－』風間書房 (2007)、第1章第1節「アボルティ幼児院までの前史とアボルティ幼児院の成立」で論じた。
- 2) フレーベル幼稚園導入期については、前掲書、第2章第1節「フレーベル・メソッド受容過程とその解釈」で論じた。
- 3) *Enciclopedia Italiana Treccani, La Cultura Italiana*, Pick, Adolfo, [http://www.treccani.it/enciclopedia/adolfo-pick\\_%28Enciclopedia-Italiana%29/](http://www.treccani.it/enciclopedia/adolfo-pick_%28Enciclopedia-Italiana%29/) (2016年7月14日閲覧)
- 4) Gasparini, D., *Adolfo Pick. Il Pensiero e L'Opera*, vol. I, II, III, edizioni del centro didattico nazionale di studi e documentazione, Firenze, 1968-1970.
- 5) 例えば、Di Pol. R. S., *L'Istruzione Infantile in Italia. Dal Risorgimento alla Riforma Moratti*. Marco Valerio, Torino, 2005. Macchietti. S. S., *La Scuola Infantile tra Politica e Pedagogia dell'età aporiana ad oggi*, editrice La Scuola, Brescia, 1986. Catarsi, E. e Genovesi, G. *L'infanzia a scuola. L'educazione infantile in Italia dalle sale di custodia alla materna statale*, Juvenilia, Bergamo, 1985. 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—A. ピックと女性活動家をめぐって—」日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第24号 (2012)。
- 6) COMUNE DI VENEZIA “Dietro la lavagna - Generazioni a scuola 1866-1977” <http://www2.comune.venezia.it/tuttoscuola/copertina.htm> (2016年7月14日閲覧)
- 7) コロミアッティの考案した「教育システム」については、拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—コロミアッティの『教育システム』を中心に—」日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第28号 (2016) で論じた。
- 8) この時期のイタリアでは、フレーベル・メソッドではなく一般的にフレーベル・システム (Il Sistema Froebel) と呼ばれていた。
- 9) 現在時点でのコロミアッティについての研究は、Bucci. Sante, *Educazione dell'infanzia e pedagogia scientifica da Froebel a Montessori*, Bulzoni editore, Roma, 1990. 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究—コロミアッティ位置付けの試み—」関西学院大学『教育学論究』第5号 (2013)。拙稿、前掲書 (2016) のみになる。
- 10) 拙稿 (2016) では、初代公教育相デ・サンクティスの書簡集の中でコロミアッティに言及している部分を拾い集め、モザイク的にコロミアッティ像を描く試みを行った。
- 11) 確認できた人物は、ヴェローナ支部長アンジェロ・ガルビーニ (Angelo Garbini) である。
- 12) 拙稿、前掲書 (2013)。
- 13) 会報の刊行はイレギュラーで、ここに挙げているものが1869年から1875年の会報のすべてである。通し番号は6号までがアラビア数字で、VII号以降がローマ数字表記になっている。
- 14) イタリア教授同盟ヴェローナ支部の成り立ちについては *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento, Bollettino* (以下 *Bollettino* と略す) N.1 (25, aprile, 1869) に詳しい。その他に *Storia sintetica della Lega d'insegnamento dalla sua origine fino ad oggi. autunno 1868-primavera 1891* (以下 *Storia sintetica* と略す) に附属幼稚園設立までの簡単な沿革が載せられている。
- 15) *Bollettino* N.3 (30, giugno, 1869), p. 44-45.
- 16) *Bollettino* N.2 (25, maggio, 1869), p. 24.
- 17) *Anno Primo. Almanacco del circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, 1871, p. 135-143.
- 18) *Ibidem*, p. 144.
- 19) 1869年8月号の原文には王立女子師範学校 (Regia scuola magistrale femminile) とある。また単に師範学校 (scuole normale) と書かれている時もあり、混乱を避けるため女子師範学校 (scuola normale femminile) で統一する。
- 20) *Bollettino* N.5 (31, agosto, 1869), p. 123.
- 21) この既述の根拠になった原文には「ヴェローナ支部の委員会は、初等クラスの学校の畑 (orto) を、フレーベルの基準に沿った庭 (giardino) にする予算を計上しすでに作業を始めた」とあるが、「畑」という言葉が前後で説明もないまま突然出てきている。コロミアッティは幼稚園開設の前年度、実験的に女子師範学校附属小学校にフレーベル・システムを導入したため、小学校用の畑があったのかもしれないが、会

- 報の書かれた文面からは不明である。ここでは後述するように「庭にする」という文言を、「幼稚園にする」ということを象徴的に言ったものととらえた。
- 22) *Bollettino* N. 5, p. 123. *Bollettino* VIII (31, marzo, 1870), p. 51.
- 23) *Bollettino* N. 6 (31, ottobre, 1869), p. 131.
- 24) *Bollettino* VII (31, dicembre, 1869), p. 27-28.
- 25) この時ヴェローナ支部は、自分たちの幼稚園をイタリア最初の幼稚園と認識していた。注41を参照。
- 26) *Bollettino* VIII, p. 76-77. 1869年度は4月にヴェローナ支部が立ち上がったため、4月から12月までの決算表となっている。なお原文の決算表では、金額が未回収分や回収分など分けて書かれているが、これらをまとめて示した。
- 27) *Bollettino* XI (31, luglio, 1871), p. 57-58.
- 28) *Bollettino* XIII (24, dicembre, 1872), p. 80-81.
- 29) *Bollettino* XV (23, novembre, 1873), p. 50-51. 収入の部は実際計算すると12103.15リラになるが、会報には12103.24リラと記されている。
- 30) *Bollettino* XVI (15, luglio, 1875), p. 16-17.
- 31) *Trent'anni di vita della Lega Veronese d'Insegnamento, 1869-1899*, p. 3. *Bollettino* N. 1, p. 13. *Storia sintetica*, p. 1.
- 32) *Bollettino* XV, p. 33-34.
- 33) *Bollettino* XVI, p. 6.
- 34) *Ibidem*.
- 35) 当時イタリアはまだ統一後の混乱期にあったため、庶民の給与水準は低かったと思われる。そのため平成28年度地域別最低賃金改定状況(厚生労働省)から一番安い最低賃金を当てはめ、714円/1時間×8時間=2リラと換算した。
- 36) *Bollettino* XI, p. 43.
- 37) *Bollettino* VIII, p. 64.
- 38) *Bollettino* XII (3, giugno, 1872), p. 21-22, p. 26-27. *Bollettino* XIII, p. 82-82. *Bollettino* XV p. 33. その他、*Storia Sintetica*, p. 1-2にヴェローナ支部が開園した幼稚園の概要がすべてまとめられているが、幼稚園の名称や所在地が1891年時点のものとなっているため、それについてはカッコ内に示した。また開園日が会報と異なっているものもあったが、すべて会報に書かれた開園日に従った。
- 39) 例えば、名称練習の様子が記録された Colomiatti, Michele, *Nomenclatura Oggettiva ad uso dei giardini d'infanzia e delle classi elementari inferiori. Lezioni pratiche fatte dalla maestra Giuseppina Battagini nel giardino d'infanzia e nelle classi elementari inferiori annesse alla R. Scuola Normale di Verona sotto direzione del Cav. M. Colomiatti*, Dalla Tipografia editrice di Francesco Apollonio, Verona, 1875. からコロミアッティの教授法的指示の下でバッタジーニが実践したことがわかる。
- 40) *Bollettino* XIII, p. 64.
- 41) *Bollettino* XV, p. 34. *Bollettino* XVI, p. 4. p. 7.
- 42) *Bollettino* XII, p. 20-21. ここでは1869年開園の幼稚園をイタリア最初の幼稚園と表記しており、これ以外の会報にも同様に書かれたものが数か所ある。またヴェネツィアの幼稚園が、ヴェローナ最初の幼稚園の後に開設したと記している(*Bollettino* IX, 11, luglio, 1870, p. 118) ことから、当人たちはヴェローナの幼稚園がイタリア初だと認識していたようである。
- 43) *Bollettino* XII, p. 21.
- 44) *Bollettino* XV, p. 34.
- 45) *Bollettino* XVI, p. 3-4.
- 46) *Bollettino* N. 6, p. 146.
- 47) *Bollettino* VII, p. 28.
- 48) *Bollettino* VIII, p. 63.
- 49) *Ibidem*.
- 50) *Bollettino* N. 5, p. 123.
- 51) *Bollettino* VIII, p. 63.
- 52) *Bollettino* X (31, marzo, 1871), P.21.ここでの記述は机と椅子が100台となっている。*Bollettino* N. 5, p. 123, *Bollettino* VIII, p. 51. には50台と記されており、この台数の誤差は不明。
- 53) 原文は「学校」(scuola)と書かれている。記事の書き手によってフレーベル式幼児学校と認識し、フレーベル幼稚園を学校と記述している場面は多い。
- 54) *Bollettino* X, p. 22.
- 55) *Bollettino* XII, p. 23-25.
- 56) 例えばデ・マウロのイタリアにおける言語統一の歴史に関する研究 De Mauro, Tullio, *Storia linguistica dell'Italia unita*, editori Laterza, Roma, 2002. の他、言語統一についての研究はイタリアで数多くなされている。
- 57) ISTAT (Istituto Nazionale di Statistica), *La lingua italiana, I dialetti e le lingue straniere, anno 2006*, 20, aprile, 2007. これ以降の新しい統計は現在のところ存在しない。
- 58) *Bollettino* XI, p. 44.
- 59) *Bollettino* IX, p. 119.
- 60) *Bollettino* XI, p. 43.
- 61) *Bollettino* XIII, p. 61.
- 62) *Bollettino* XVI, p. 8.
- 63) *Bollettino* IX, p. 120.
- 64) 拙著、前掲書(2007)、p. 69-70, p. 81-87にアボルティ・メソッドとフレーベル・システム間の論争について論じた。
- 65) *Bollettino* IX, p. 120.
- 66) *Bollettino* XVI, p. 8.
- 67) *Ibidem*, p. 12.

## 参考文献

1. Anno Primo. *Almanacco del circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, Tipografia editrice di Francesco Apollonio, Verona, 1871.
2. Bucci, Sante, *Educazione dell'infanzia e pedagogia scientifica da Froebel a Montessori*, Bulzoni editore, Roma, 1990.
3. Catarsi, E. e Genovesi, G. *L'infanzia a scuola. L'educazione infantile in Italia dalle sale di custodia alla materna statale*, Juvenilia, Bergamo, 1985.
4. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, *Bollettino* N. 1 (25, aprile, 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. V. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
5. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*,



- Bollettino* N.2 (25, maggio, 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. VI. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
6. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, *Bollettino* N.3 (30, giugno, 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. VII. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
  7. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, *Bollettino* N.4 (30, luglio 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. VIII. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
  8. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, *Bollettino* N.5 (31, agosto, 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. IX. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
  9. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, *Bollettino* N.6 (31, ottobre, 1869), *Estratto dall'ALBA*, N. XI. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1869.
  10. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, VII. della serie, *Bollettino* N.1 - anno II, (31, dicembre, 1869), *Estratto dall'ALBA* N.1, annata seconda. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1870.
  11. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, VIII della serie, *Bollettino* N.2 - anno II, (31, marzo, 1870), *Estratto dall'ALBA* N.2, annata seconda.. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1870.
  12. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, IX. della serie, *Bollettino* N.3 - anno II, (11, luglio, 1870), *Estratto dall'ALBA* N. VIII - annata seconda. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1870.
  13. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, X. della serie, *Bollettino* N. I - anno III, (31, marzo, 1871), *Estratto dall'ALBA* N. III - annata terza. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1871.
  14. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XI. della serie, *Bollettino* N. II - anno III, (31, luglio, 1871), *Estratto dall'ALBA* N. VIII - annata terza. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1871.
  15. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XII. della serie, *Bollettino* N.1 (3, giugno, 1872). *Estratto dall'ALBA* 号不明. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1872.
  16. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XIII. della serie, *Bollettino* N. II - anno IV, (24, dicembre, 1872), *Estratto dall'ALBA* N. XI - XII, annata quarta. Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1873.
  17. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XIV. della serie, *Bollettino* N. I - anno V, (13, Agosto 1873), Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1873.
  18. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XV della serie, *Bollettino* N. II - anno V (23, novembre, 1873). Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1873.
  19. *Circolo-Verona della Lega Italiana d'Insegnamento*, XVI, della serie, *Bollettino* N.1 - anno VII, (15, luglio, 1875). Stabilimento Tipografico di Francesco Apollonio, 1875.
  20. COMUNE DI VENEZIA "Dietro la lavagna - Generazioni a scuola 1866-1977" <http://www2.comune.venezia.it/tuttoscuola/copertina.htm> (2016年7月14日閲覧)
  21. De Mauro, Tullio, *Storia linguistica dell'Italia unita*, editori Laterza, Roma, 2002.
  22. Di Pol. R. S., *L'Istruzione Infantile in Italia. Dal Risorgimento alla Riforma Moratti*, Marco Valerio, Torino, 2005.
  23. *Enciclopedia Italiana Treccani, La Cultura Italiana*, Pick, Adolfo, [http://www.treccani.it/enciclopedia/adolfo-pick\\_%28Enciclopedia-Italiana%29/](http://www.treccani.it/enciclopedia/adolfo-pick_%28Enciclopedia-Italiana%29/) (2016年7月14日閲覧)
  24. Gasparini, D., *Adolfo Pick. Il Pensiero e L'Opera*, vol. I, II, III, edizioni del centro didattico nazionale di studi e documentazione, Firenze, 1968-1970.
  25. ISTAT (Istituto Nazionale di Statistica), *La lingua italiana, i dialetti e le lingue straniere, anno 2006*, 20, aprile, 2007.
  26. Macchietti. S.S., *La Scuola Infantile tra Politica e Pedagogia dell'età apertiana ad oggi*, editrice La Scuola, Brescia, 1986.
  27. Colomiatti, Michele, *Nomenclatura Oggettiva ad uso dei giardini d'infanzia e delle classi elementari inferiori. Lezioni pratiche fatte dalla maestra Giuseppina Battagini nel giardino d'infanzia e nelle classi elementari inferiori annesse alla R. Scuola Normale di Verona sotto direzione del Cav. M. Colomiatti*, Dalla Tipografia editrice di Francesco Apollonio, Verona, 1875.
  28. *Storia sintetica della Lega d'insegnamento dalla sua origine fino ad oggi. autunno 1868-primavera 1891*.
  29. *Trent'anni di vita della Lega Veronese d'Insegnamento, 1869-1899*.
  30. 拙著『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究—言語教育を中心に—』風間書房、2007。
  31. 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—A. ピックと女性活動家をめぐって—」日本ベスタロッチャー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第24号、p.1-12、2012。
  32. 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究—コロミアッティ位置付けの試み—」関西学院大学『教育学論究』第5号、p.55-64、2013。
  33. 拙稿、「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—コロミアッティの『教育システム』を中心に—」日本ベスタロッチャー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第28号、p.23-47、2016。

Per la questa ricerca, soprattutto vorrei ringraziare la Dott.ssa Gloria Maroso del Comune di Verona, con cari ricordi, ed anche l'Archivio di Stato di Verona.



この研究は日本ペスタロッcher・フレーベル学会第34回大会（2016年9月10, 11日）で発表した「19世紀後半におけるヴェローナの幼稚園—『イタリア教授同盟』の機関誌分析を通して—」の研究に加筆修正を加えたものである。

この研究は、科研費「基盤研究(C)」課題番号：20193823の研究の一環である。